

令和7年度宮崎大学農学部地域貢献最優秀賞（教員部門）受賞のことば

農学部森林環境持続性科学領域

竹下 伸一 准教授

令和7年度の地域貢献最優秀賞に選出いただき誠にありがとうございます。

今回、受賞対象となった二つの取組、「五ヶ瀬中等教育学校との連携」と「宮崎県における竜巻被害に関する一連の活動」は、どちらも地域の大学だからこそ連携・活動できたことであったと感じています。

1つ目の取組は、2019年から継続的に連携して取り組んできた探究活動へのサポートです。とくに2023年からは、世界農業遺産に認定されている山腹用水路を対象に高校生たちにその特徴の調査方法やまとめ方をアドバイスしてきました。彼らは調査した内容を地理学会2025年春季学術大会高校生ポスターセッションで発表したところ「会長賞」を受賞し、そして探究活動そのものが第27回日本水大賞で「国土交通大臣賞」を受賞することとなりました。いずれも私自身の活動ではなくて、五ヶ瀬中等教育学校の3人の生徒さんと上田教諭の取組こそが評価されたわけですので、私はそのおこぼれに預かったという気がしています。

2つ目の取組は、2024年8月末に襲来した台風10号によって、8月28日から29日にかけて県内で同時多発的に発生した竜巻による被害を、いち早く現地に入って調査したことが評価されたものです。私自身は竜巻を専門としているわけではありません。しかし、地域に存在する大学の一員として、身近に起こった気象災害の実態を把握したい、今後の防災行動に役立てたい思いで調査したことが、地域や防災上の役に立つとして全国放送の番組、地元テレビ局、新聞各社が取り上げてくださいました。

この活動が評価されたことは光栄なことですが、被害に遭われた方々のことを思うと単純に喜ぶわけにはいかない複雑な思いがします。

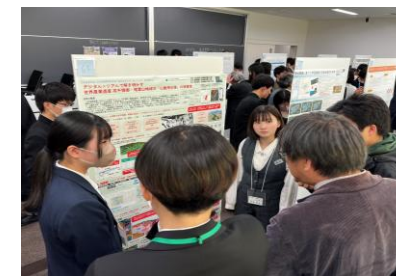
喜びと同時に、責任の重さを改めて感じています。地域で起こる出来事に対して、研究者として、教育者として、そして一人の地域の住民として、どう向き合うべきかを問い続けながら、今後も宮崎大学農学部の一員として地域に寄り添う活動を続けていきたいと思っています。



調査中の生徒たち



データ分析中の生徒たち



学会発表の様子

令和7年度宮崎大学農学部地域貢献優秀賞（教員部門）受賞のことば

農学部農学科海洋生命科学領域

田岡 洋介 教授

この度は「宮崎大宮高校課題研究 グローバル協創－WWL 生徒探求発表会－」の取り組みに対して、このような賞を頂き厚く御礼申し上げます。

私の研究室「海洋環境微生物学研究室」では、微生物機能に着目し、基礎研究から各産業への応用に関する研究を展開しています。この産業の出口として大きく3つ、「養殖」「食品」「発酵工学」に力点を置き、取り組んで参りましたが、今回受賞頂いた取り組みは2つめの「食品」に関するものです。宮崎県は「宮崎牛」に代表されるように畜産や農業が盛んですが、水産物について多様な資源を有しています。私が2011年に宮崎大学に着任してから、宮崎の水産物を活かした発酵食品づくりに取り組みたいという想いがあり、特に注力したのは「魚醤」の開発でした。魚醤はナンプラーやニョクマムに代表されるように東南アジアで汎用される調味料ですが、その味だけではなく、機能性についても幅広く研究報告がなされています。日本における、いわゆる「魚離れ」が言及されて久しいですが、一方で世界的な水産物の消費量は増加の一途をたどっています。周辺が海に囲まれた日本では古くから魚食文化が根付いてきましたが、水産物の高度利用の観点から「魚離れ」を改めて見つめなおしたい、という思いもありました。

このような背景から、宮崎県産の水産物を用いた機能性魚醤の開発・研究に取り組んできました。例えば、宮崎県は古くから鯉食文化が根付いておりますが、鯉の機能性を活かしたいと、地元企業と連携のもと西米良産養殖鯉を用いた魚醤の開発と機能性の評価を行いました。一連の研究において、鯉魚醤には多様な抗酸化活性やin vitroで培養したがん細胞の増殖抑制効果があることが示唆されました。今回受賞させて頂いた研究テーマは、宮崎大宮高校課題研究の研究アドバイザーとして、私が携わらせて頂いたものです。生徒の皆さんは宮崎県で水揚げされる水産資源のうち、「シイラを用いた魚醤の開発」をテーマアップし、取り組まれました。私の研究室で培った知見を活かしながら、生徒の皆さんとともに、シイラ魚醤の開発を行いました。一連の研究は、グローバル協創という学習の一環として行われ、その成果は喜ばしいことに、三菱みらい財団 高校生MIRAI万博「第一部_高校生たちの成果発表」の最優秀賞6チームの1つに選ばれ、生徒の皆さんは晴れて大阪・関西万博EXPOホールでの発表の機会を得られました。

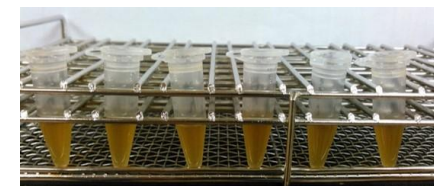
日本、そして宮崎における魚食文化を内包した形で、地元の水産物を活かした研究を、このように地域の企業や高校の生徒の皆さんと取り組めたことは、私にとっても貴重な経験となりました。これらの研究成果の社会実装化を見据えて、これからも地域の皆さんと、研究を推進できればと思っています。最後に、本研究に携わって頂いた宮崎大宮高校の先生方、生徒の皆さん、地域の生産者の皆さん、そして当研究室の学生の皆さんに厚く御礼申し上げます。



大阪・関西万博EXPOホールにて発表する
宮崎大宮高校の皆さん



宮崎大学農学部にて研究成果を発表する
宮崎大宮高校の皆さん



作成した魚醤

令和7年度宮崎大学農学部地域貢献最優秀賞（職員部門）受賞のことば

次世代農学教育研究センター 木花フィールド

満富 和満 技術職員 高崎 彩也香 事務補佐員

この度は、表彰を賜り、推薦および申請にご尽力いただきました次世代センター（木花フィールド職員）の皆様、ならびに申請に携わっていただいた教職員の皆様に心より感謝申し上げます。

約30年前より、当フィールドでは保育園・幼稚園児を対象としたサツマイモの収穫体験を実施してまいりました。しかし近年はサツマイモの病害やイノシシによる獣害が増えており、さらに新型コロナウイルス流行時には感染防止のため、活動を中止せざるを得ませんでした。終息後、改めて検討した結果、収穫物をジャガイモへと変更し、令和6年度より収穫体験を再開いたしました。

「じゃがいも収穫体験」では、5月の大型連休中は一般の方を、5月および12月の平日は保育園・幼稚園・支援学校等を対象としています。令和6年度は、連休3日間で315人、平日には30団体896人、延べ1,211人の方にご参加いただきました。令和7年度は5月のみの開催で、連休3日間は874人、平日には28団体894人、延べ1,768人とさらに多くの方にご参加いただき、少しずつ活動が周知されてきていることを実感しています。

栽培準備は技術職員により約1年前から始まっています。6月に緑肥を育て、翌年1月に種芋の植え付け、その後は病害予防の薬剤散布を行い、5月の収穫に備えます。2月頃からは事務職員により告知や募集、参加者との連絡調整を行い、互いに情報共有と協力を重ねながら準備を進めていきます。平日の活動では1日あたり1～3団体ほどを受け入れています。しかし雨天による延期等が重なると最大5団体ほどを同時に対応することがあり、技術職員、事務職員互いの協力の下、活動が成り立っています。連休中の活動においても木花以外の各フィールドから応援に来ていただくこともあり、他の職員の協力が欠かせません。

引率される先生方から、特に子どもたちは、直接土に触れ、野菜を自らの手で収穫する、というような自然と関わる機会が減ってきており、大学のような安心できる場で経験を提供していただけるのはありがたい、と感謝の言葉をいただきました。また連休中には、子ども連れの方だけでなく学生からお年寄りまで、お一人での参加やご友人同士での参加も多数見受けられています。

今回の表彰を励みに、今後も地域に住まうあらゆる方に安全で有意義な農業体験の機会を提供できる活動として継続し、地域の教育と交流に貢献してまいります。

活動にご協力いただいた皆様、そして活動にご参加いただいた皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。



ゴールデンウィーク「じゃがいも収穫体験」
(R6年度)の様子



ゴールデンウィーク「じゃがいも収穫体験」
(R6年度)の様子



団体向け「じゃがいも収穫体験」
(R6年度)の様子